

ラムステッドと日本語学者たち

—フィンランド側の資料をもとに—

小川 誉子美¹

Ramstedt and the Japanese Linguists

Yoshimi OGAWA

目次

1. はじめに
2. 活動と実績
3. 帰国後の活動
4. 1924年までの日本語比較研究
5. 1924年の論文
6. フィンランド側資料
7. 書簡に見る学術交流
 - 7-1 泉井久之助
 - 7-2 岡正雄
 - 7-3 外山高一
 - 7-4 吉武三郎
 - 7-5 ド・チョンホ
8. おわりに

1. はじめに

アルタイ学者ラムステッドが、ヘルシンキ大学で日本語を講じていたという事実を知ったのは、筆者がヘルシンキ大学アジア・アフリカ言語文化学部に赴任する1989年のことだった。担当の日本語講座の沿革史の冒頭に、ラムステッドの名前を見つけたときは、大層驚いた。さらに、職場を見渡すと、上司(Kho, Songmoo)もかつてはラムステッド研究のためフィンランドに留学した言語学者であり、また、研究所の秘書は、ラムステッドの史料を整理・管理し、1998年には、*Bakshi, Biliktu · The Knowledgeable Teacher. G.J. Ramstedt's Career as a Scholar* (1998 H. Halén) を出版するなど、ラムステッドに通じた人々に囲まれ

¹ 小川 誉子美 横浜国立大学教授 専門：日本語教育史・現代日本語研究；
Yoshimi OGAWA, Professor at Yokohama National University, A specialist in History of Japanese teaching, Contemporary Japanese syntax.

ていた。また、着任後間もないころ、日本語講座沿革史の二人目に名前があった桑木務先生がヘルシンキ大学を訪問され、1940年代のソ・フィン戦争の最中にヘルシンキ大学に着任されたという話をうかがった。桑木先生は、ラムステッドについては、著書に、「広辞苑を片手に日本語を話す学者」と記されている²。

帰国後、筆者の関心は、戦前のヨーロッパの日本語講座の実態解明に向かい、休みが始まると、あらたな資料を求めて渉獵の日々を過ごすこともしばしばあった。欧州各機関の古文書館で、日本人学者の記録に出会うことはめずらしくなかった。ヘルシンキ大学の古文書館には、藤岡勝二、泉井久之助、村山七郎、時枝誠記、小倉進平らが、ラムステッドに宛てた書簡や著書もあった。

本稿は、ラムステッドの日本語研究に関する功績と、ラムステッドと日本人との交流を示す資料の一部を紹介するものである。これまで、ラムステッドについては、アルタイ言語学者としての実績や、初代駐日代理公使としての活動を中心に紹介されてきた。一方、10年に及ぶ滞日経験の中で、日本の学者らとの交流を深めたという側面も注目に値する。滞日中、日本語、朝鮮語を研究し、1924年には日本語の系統に関する見解を発表した。日本語に関する論文は、200を超えるラムステッドの業績の中で³、1924年の *A Comparison of the Altaic Languages with Japanese*, *Transactions of Asiatic Society of Japan The 2nd series I Asiatic Society of Japan* のみであるが、その後の日本語の系統研究の方向性を示したという点でそれまでの日本語系統論研究とは異なった。また、退官間近の1937年には、フィンランドではじめての日本語講座を開設した。

一連のラムステッドの研究活動に啓発された日本人学者らがラムステッドに見解を求め、自著を送っていたという記録がヘルシンキ大学に残っている。本稿は、すでに明らかにされているラムステッドの学者間のネットワークや日本語研究について概略を紹介し(2・3・4・5節)、ヘルシンキ大学の資料から、日本の学者らとの接点を紹介する(6・7節)ものである。

2. 活動と実績

ラムステッド (G.J. Ramstedt 1873 -1950) は、白鳥庫吉のことを「知識人の

² 桑木務 (1981) 『大戦下の欧州留学生活—ある日独交換学生の回想』中公新書

³ 来日までの代表的な業績に、Über die Konjugation des Khalkhamongolischen 1903 「ハルハモーコ語の動詞変化」、Kalmückische Sprachproben 1909 「カルムイク語資料」、Zwei uigurische Runeninschriften in der Nord-Mongolei 1913 「北モーコの二つのウイグル文字碑文」などがある。

間では白鳥との交流が最も有意義であった」⁴と回想する。東洋学者の白鳥庫吉は、明治34年から36年までヨーロッパに留学し、ドイツ・ハンガリー・フランス・フィンランド・ロシア等を歴訪、主としてパリ滞在中に資料を収集し、アルタイ語系諸民族の言語と歴史の研究に携わってきた。この白鳥の紹介により、ラムステッドは、日本の学会で、学者らとの知己を得るようになった。その一つが、東京帝国大学で招待講師として行った講演である。ラムステッドが行った、フィン・ウゴル族の歴史、モンゴル語やツングース語の相関関係、フィンランドの民族文学、民族言語の収集方法などについての講演の中で、特に、民族文学について、フィンランド文学協会が50万あまりにのぼる採集原稿の収集を所蔵しているという話は、民族伝承詩である *Kalevala* の初めての日本語訳『カレワラ』（1938）が出版されるきっかけとなった⁵。また、方言や民族言語の情報を収集する郷土言語協会の活動の紹介とともに厳密な方言調査の必要性を語った講義には、柳田国男も聴講者の一人として参加していた。柳田は方言収集旅行の成果として「蟻」「蜘蛛」という語の命名、発生、伝播について発表し、ラムステッドにその評価を求めたという。

1926年に、東京倶楽部で行った「北アジア」についての講演には、聴衆の一人として参加した宮沢賢治は、フィンランドの生活観に根差した、物質文明を排し農民文化を築こうという話に感銘を受け、その後、詩集『春の修羅』や童話集『注文の多い料理店』などの著書を送っている。二人の交流は帰国後も続いた。一方、外交官としてフィンランドの広報活動のため日本各地で講演を行う機会もしばしばあり、その際、エスペラント語で行われたこともあった。フィンランドでエスペラント会会長を勤めた経験があったため、当時発足したばかりの日本エスペラント学会から、活動支援に期待が寄せられていた。その模様は『エスペラント運動史』に「日本のエスペランティストは、はじめて生きのいい、一流のエスペラントに接して、ラムステッドの話すエスペラントを自分のものとして吸収した」⁶と記されている。1929年発行のエスペラント学会誌“*La Revuo Orienta*”の巻頭では、ラムステッドの帰国に際し、その功績が称えられ、謝意が捧げられた⁷。ラムステッドは、エスペラ

⁴ 坂井（1987:84）

⁵ 坂井（前掲：127）

⁶ 初芝（1998：51）

⁷ *La Revuo Orienta* 9号（1929年9月 *Japana Esperanto Instituto* 発行）に、「ラムステッド公使を送る」と題した記事が掲載され、日本のエスペランティストに刺激を与え、日本のエスペラント発展のために寄与したことが称えられている。

ント語の他、ドイツ語、ロシア語、スウェーデン語などの西欧語及び、モンゴル語をはじめ、中央アジアの複数の言語を理解し会話力を有していたが、滞日中は、日本語以外に朝鮮語も学んだ。朝鮮語は、中央大学の学生、リュウ・チンコル(Ryu Chin-kel)から個人教授を受けていた⁸。小倉進平ら朝鮮語学者や金田一京助、新村出とも交流の機会を得た。交流は、帰国後も続き、小倉進平から送られた朝鮮語関係の論文や著書は、ヘルシンキ大学に所蔵されている。滞日中にまとめたラムステッドの朝鮮語に関する論文 2 本は、「朝鮮語の沿革について」(小林英夫訳)、「朝鮮及日本の二単語に就て」(金田一京助訳)として日本語でも出版された。ラムステッドは、外交官としての任務の傍ら、あらたな言語研究に着手したのである。

3. 帰国後の活動

1929年、足かけ10年の任務を終え、日本から戻ると、精力的に論文を発表する。帰国から10年後には、ヘルシンキ大学で日本語を講じた。この開講は、1学期間のみ開講であったが、なぜこの時期に開講されたのか等、経緯については確認できない。しかし、当時の受講生 Aulis Joki (1913 - 1989、言語学者、元ヘルシンキ大学言語学科教授) のノートが発見されたことにより、講義内容が明らかになった。そのノートに記された内容は、発音や日本語のご構成や語彙の語源に関するメモが多く、ラムステッドの見解が披露された講義であったと推察される。

一方、滞日経験から生まれた日本をテーマとして著作には次の二冊がある。一つは、日本での生活をまとめた、*Lahettiläänä Nipponissä* 『フィンランド初代代理公使滞日見聞録』である。1950年に出版された本書は、日本の文化社会や日常生活の紹介とともに、外交活動や学術交流について紹介している。例を挙げると、北白河宮殿下や皇后陛下から日本語の系統や学習上の困難点について意見を求められるなど、日本語を話す学者公使として一目置かれていたこと、また、日本のフィンランドに対する好意的な感情に支えられて有利に仕事がすすめられた様子が見える。日本語に関しては、漢字習得に割かれる多大な時間、読み等の複雑さ、カタカナ表記の不統一など、日本語の表記法に関し不合理な側面が多いという見解を記しているにとどまり、日本語表記法に関する提案については述べられていない。本書は、よき思い出を中心に、帰国後20年以上を経て、亡くなる年に出版された回想録であり、よき思い出を中心に綴られた正確な日時や固有名詞の記述が少ないことから、

⁸ Halén(1998 : 243)

資料としては限界がある。

2冊目は、Japanilaisia Runoja『日本の詩歌』である。これは、日本の短歌や俳句を集め、フィンランド語で紹介したもので、日本に同行した娘のエルマが序文を寄せ、彼の死後1953年に出版された。短歌や俳句の解説及び、小野小町、紀貫之、西行法師、明治天皇、石川啄木らの短歌、西鶴、芭蕉、蕪村、一茶、子規、漱石らの俳句など、あわせて百余りを選び、フィンランド語に訳した。

こうした回想録の執筆、詩歌の紹介などは退官後に手がけられた。ラムステッドの出版物のほとんどが言語研究に関する論文や辞書であり、その意味においても、この二冊は貴重な例外であると言える。この書は、晩年、研究の集大成である『アルタイ言語学概説』を執筆する傍らでつづられたと推察される。

4. 1924年までの日本語比較研究

ラムステッドの日本語に関する唯一の論文「アルタイ諸語と日本語の比較」(A comparison of the Altaic languages with Japanese, Transaction of Asiatic Society of Japan, the 2nd series (1924))は、日本アジア協会の紀要に掲載されたが、この紀要は、主として来日外国人研究者らが研究成果を発表する場であり、ラムステッドも当協会の学問的貢献を評価し感謝を示している。紀要には多岐にわたる分野の論文が掲載されており、日本やアジアに関心のある内外の研究者の間で読まれたものと思われる。

まず、ラムステッドが発表した1924年以前、学説史に残る、内外の日本語の系統研究の展開について、小川(2001)の一部を転載しつつ、議論の流れをたどる。

19世紀のヨーロッパで、比較言語学の手法が確立して以来、いわゆる印欧語間の親族関係が証明されていった。日本語に関しては、ユリウス・クラプロート⁹を皮切りに、主なものをあげれば、ボラー(A. Boller)の「日本語がウラル・アルタイ系に属することを証明する」(1857)、プレーレ(W. Pröhle)による「日本語をウラル諸語、アルタイ諸語と比較する研究」、ウインクラー(H. Winkler)の「日本人とアルタイ人」(1894)、「ウラル・アルタイ語族、フィンランド語と日本語」(1909)などがある⁹。国内では、藤岡勝二がアルタイ語との関連で日本語の系統について「日本語の地位」(1908)¹⁰を発表した。ドイツに留学し、ウ

⁹ ラムステッドは執筆時、プレーレの論文は目を通していなかったという。

¹⁰ 『国学院雑誌』第14巻

インクラールとも交流のあった藤岡は、この論文の中で、ウラル・アルタイ語の親族関係を決定する、印欧語とは異なる言語的特徴を 14 項目を上げ、日本語は、母音調和の現象をのぞく 13 項目を満たすとした¹¹。

朝鮮語との比較を通じて、類似がどの程度のものであるのかという視点からの議論もあった。日本語と朝鮮語の類似性には、17 世紀ごろから関心もたれ、これに着目した著作が多く発表された。アストン (G.W. Aston) は、*A comparative study of the Japanese and Korean Language* (1879)¹²を著し、音声・文法の比較をもとに、両言語の親族関係は疑う余地がないが、その程度について断言するのは難しいと述べた。大韓帝国に留学経験のある金沢庄三郎は、両言語同系説をまとめた学位論文『日韓両言語同系論』(1910)を発表した¹³。体系的な形態素や語尾の比較を重視し、言語構造全般にわたって比較、150 の語彙及び 15 の文法的形態素の一致から同系を証明したとした。しかし、音韻法則を基準とした形態素の一致や共通祖語の復元による説明には成功しておらず、服部四郎は、「当時はこれによって両言語間の親族関係が証明されたと考えた人もいるが、今日から見ればその証明は成功していない」¹⁴という。白鳥庫吉は、「日本書紀に見えたる韓語の解釈」(1897)¹⁵で、日本書紀に現れることばの朝鮮語による解釈を試み、両言語の類似性を明らかにしようとした。その後、1901 年から 2 年間欧州各地を歴訪、帰国後、日本語の比較研究の範囲を拡大し、「国語と外国語との比較研究」(1905)¹⁶を著した。その中で、ウラル・アルタイ諸言語から南洋語にいたる 60 余りの言語と比較し、日本語の語源解明を試みた結果、両言語が親密な関係にあるということを宣言した。しかし、1914 年には、「朝鮮語と Ural Altai 語との比較研究」¹⁷において、朝鮮語はウラル・アルタイ語に属するという事は疑いの余地がないとしつつも、日朝両言語に類似した単語が少なく、類似していると以前指摘した単語も、その内容は証明に至るものではないと以前の宣言を撤回した。法学者、宮崎道三郎の「日韓両言語の比

¹¹ 母音調和は、後に、有坂秀世らによって上代日本語に存在したこと、小倉進平らによって 15 世紀の朝鮮語にも存在したことが明らかにされた(服部 1959 : 42)。その後、堀岡文吉は、この 14 項目はマラヨ・ポリネシア諸語にもあてはまるから、アルタイ語同系説の根拠にはなり得ないと述べた。

¹² *The Journal of the Royal Asiatic Society of Great Britain and Ireland, New Series, Vol.11, Part II, London, 1879*

¹³ ラムステッドは執筆時、目を通していなかったという。

¹⁴ 服部 (1959 : 36)

¹⁵ 『史学雑誌』第 8 編 第 4 号

¹⁶ 『史学雑誌』第 16 編 第 2-9

¹⁷ 『東洋学報』第 4 巻第 2 号

較研究」(1906)¹⁸、新村出の「国語系統の問題」(1911)¹⁹、小倉進平の『国語及朝鮮語のため』(1920)は、両言語の類似を認めつつ、同系か否かという問いに対しては慎重であった²⁰。朝鮮語との比較研究は、主に、史学者や国語学者によってすすめられ、主として語彙の比較を通じ、日本語が朝鮮語と同系であると宣言されたり、同系である蓋然性の高いことが指摘された²¹。

琉球語に関しては、19世紀半ばから相次ぎ琉球への上陸を開始した西欧の宣教師ベッテルハイムらにより、研究が開始された。チェンバレン(B. H. Chamberlain 1850-1939)は、東京帝国大学博言科を1890年に退職した後、琉球研究に着手、1893年からは主に言語に関する論文をまとめはじめ、1895年には、日本アジア協会の紀要に、*Essay in Aid of a Grammar and Dictionary of the Luchuan Language, TASJ Vol. 23*, 続いて、*A comparison of the Japanese and Luchu language, TASJ Vol. 23* を発表し、琉球語研究の金字塔を打ち立てた。これらの論文では、琉球語の系統、文法、音韻、語彙など詳細な記述を行ない、比較言語学の手法によって琉球語と日本語の親族関係を明らかにし、日本語と琉球語をアルタイ系の言語であろうと推測した。ラムステッドは、方言研究の重要性を指摘していたが、彼が、日本語の方言についての学術的な考察の中で目を通した唯一の著作が、このチェンバレンの琉球語研究だという。

5. 1924年の論文

さて、こうした流れの中で、ラムステッドの1924年の論文が発表された。ラムステッドが行った比較研究は、類似性から出発したのではなく、原始日本語がアルタイ的特徴を持つ可能性を探る方法を示したのであり、それは、主に音韻再構の方法と形態素の比較であった。特に、資料が豊富で、アルタイ諸語をはじめ、琉球語の例も扱った。つまり、アルタイ諸語の変遷の歴史をたどることで、日本語の音韻史を類推したともいえよう。日本語の音節構造が開音節であるということは、閉音節でもあるアルタイ語系統説を妨げるものであった。また、日本語の語頭音に有声子音がたたないということも、同様に、アルタイ語系統説を妨げるものであったが、みごとに、この障害を取り除く可能性を示した。つまり、想定されたアルタイ基語と、原始日本語が同系であると認定するためには原始日本語の姿をどのように解釈すればいいのかという視点からの研究であった。日本語がアルタイ諸語と同系であるというための証明方法を提

¹⁸ 『史学雑誌』第17編 第7-10号

¹⁹ 『太陽』17巻1号

²⁰ 『国語及朝鮮語のため』(1920) ウツボヤ書店

²¹ 朝鮮語との比較研究の背景に国策との関係が指摘されている。

示したのであって、実質的に帰属するかどうかという証明はしていない。

論文の最後に、日本語の系統を解明する手がかりとして、古日本語の姿を明らかにするため、台湾島の固有の言語を調査することが重要だとした。しかし、台湾での調査の機会に恵まれず、日本語とアルタイ語の関係は、予備的研究が不足しているので明らかになっていないという見解を示している。

このほか、ラムステッドが日本語について見解を述べたのは1942年には、ヘルシンキで「日本語の歴史について」と題した講演の中で、日本語と朝鮮語の関係について話している。この内容は、後に印刷され、京都大学文学部教授兼図書館長の泉井久之助にも送られている。その後、自身の研究の集大成ともいえる『アルタイ言語学概説』 (*Einführung in die altaische Sprachwissenschaft* 1952) において、日本語をアルタイ系言語から除外したものの、『朝鮮語源研究』 (*Studies in Korean etymology* 1949) においては、随所に日本語との比較を行っている。その後の日本語研究については、当時の状況が垣間見られる資料として、村山七郎にあてた書簡で次の様に述べている。「自由な時間があって、いくらか若かったなら、日本・朝鮮語の研究に専念したいものです。この研究分野は未開拓です。この分野で現在の研究者たちが示している動揺的な、まちがった結果からそのことがわかります」²²と記している。

6. フィンランド側資料

ラムステッドの日本人研究者との交流は、以上にとどまらない。これらを迎えるためには、日本の外交資料館以外に、フィンランド国内では、フィン・ウゴル協会、フィンランド外務省、ヘルシンキ大学、国立古文書館が所蔵する資料を精査する必要がある。本章で紹介するのは、ヘルシンキ大学のラムステッド文庫及び国立古文書館が所蔵するラムステッド宛て書簡の中で、日本人学者や欧州の研究者からの書簡である。日本語学者・日本人学者・日本の諸機関からの書簡の一部を一覧にしたものが、以下のリストである。

差出人	日付	言語
藤岡勝二	1923/8/1	英語
Haguenaer	1937/5/20	フランス語
Haguenaer	1950/4/20	フランス語
星健之助	1924/3/21	英語

²² 村山・大林 (1973 : 94)。1944年9月6日ヘルシンキ発のドイツ滞在中の村山にあてた書簡。

市河彦太郎	1926/6/6	英語
市河彦太郎	1923/3/16	英語
市河かよ	1949/7/2	英語
泉井久之助★	1950/5/1	フランス語
泉井久之助★	1950/6/9	英語
泉井久之助★	1950/8/10	ドイツ語
渡辺忠雄	1926/4/5	フィンランド語
森本寛造	1925/12/19	日本語
村山七郎	1947/3/17	英語
小倉進平	1930/3/1	英語
小倉進平	1930/3/23	英語
岡正雄★	19 ? /5/25	日本語
長田夏樹	1950/7/25	エスペラント語
村山七郎	1944/8/7	ドイツ語
Ramming	1939/3/14	ドイツ語
Ramming	1935/3/6	ドイツ語
時枝誠之 ²³	1930/9/1	英語
外山高一★	1926/8/28	ドイツ語
吉武三郎★	1933/3/12	英語
吉武三郎★	1933/4/10	英語
石田幹之助 (モリソン文庫)	1920/6/7	英語
岩井大慧 (東洋文庫)	1935/4/8	英語
精松源一★★	不明	モンゴル語
Do Cyong-Ho (都宥浩) ★	1938/12/27	ドイツ語

★ 本節でとりあげるもの。★★ 精松書簡も【画像 9, Pictures 9】とした。

書簡に使われた言語は、日本語、フィンランド語、英語、ドイツ語、フランス語、エスペラント語、モンゴル語と 7 言語におよび、差出人は、ヨーロッパからは、シャルル・アグノーエル (パリ大学)、マーティン・ラミング (ベルリン大学)、吉武三郎 (ロンドン大学)、また、日本からは、比較言語学者の泉井久之助、村山七郎、モンゴル語学者の精松源一、朝鮮語学者の藤岡勝二、小倉進平、国語学者の時枝誠之、日本の図書館司書、在フィンランド日本公使市河

²³ 時枝誠記か。

彦太郎・かよ夫妻らである。

内容は、ラムステッドから日本の図書館や関係者に著書が送付されたことに対する御礼、自著を送付し研究成果を報告し助言を求めるもの、アルタイ系言語の証明について方法論を問うものなどが含まれる。

次節では、泉井久之助をはじめ、ラムステッドと研究上接点を持った者の中から五名を紹介する。

7. 書簡に見る学术交流

7-1. 泉井久之助 (1905-1983)

泉井久之助からの書簡は、1950年送付の3通(フランス語、英語、ドイツ語による)が確認される。

フランス語による書簡(5月1日付)【画像1, Pictures 1】では、新村出の後任として京都大学で言語学を教え、日本語の系統研究を専門とする者と自己紹介をし、ラムステッドの著書『朝鮮語文法』から得られる多大な科学的恩恵に感謝の意を表している。手紙の趣旨は、『朝鮮語語源学』の送付依頼であり、あわせて、京都大学図書館とラムステッドとの間で図書交換を申し出ている。

英語による書簡(6月9日付)【画像2, Pictures 2】は、ラムステッドからの返信、『朝鮮語語源学』がすでに発送されたことへのお礼、さらに、泉井の著書『比較言語学研究』(1949年、創元社)を別便で送った旨が記されている。さらに、学術誌『国語学』にまもなく掲載されるという泉井の日本語とフィン・ウゴル語族との関係に関する議論について、ラムステッドの見解を求めている。

ドイツ語による書簡(8月10日付)【画像3, Pictures 3】は、ラムステッドの著書『日本語の歴史』(1944)『朝鮮語語源学』(1949)が京都大学図書館と泉井宛に送付されたことへのお礼とラムステッドの一連の著作に関する日本の学者らの評価について記されている。

この3通は、3か月余りの間に送付されているが、最後のものは、ラムステッドが亡くなる数カ月前であり、2通目に対する回答がラムステッドからあったかどうかはここでは確認できない。

7-2. 岡正雄 (1898~1982)

日本に滞日中のラムステッドに送られたと思われる岡正雄自筆の書簡【画像4, Pictures 4】である。岡正雄は、日本の民族学の設立に深くかかわった民族学者である。1926年から、柳田國男の談話会に参加し、柳田國男と雑誌『民族』の編集、刊行した。1929年、渋沢敬三から資金援助を受け、ウィーン大学へ留学、民族学のウィーン学派を築いたヴィルヘルム・シュミットに師事した。1933

年には、学位論文「古日本の文化層」を提出し、博士号を取得している。5巻に及ぶ膨大な量のドイツ語の論文は、日本の基層文化について論じたもので、日本文化はいくつかの異なった文化複合からなる多元的起源をもつ文化であると主張した。その後、岡は、日本の民族学の理論的指導者としての立場を築いていく。ラムステッドは、日本語に関しても、同様の示唆、可能性を指摘しており、岡が、1920年代にラムステッドの研究に触れたことは、岡の日本文化の基層研究の方向性にも何らかの影響があったものと推測される。

ラムステッドがヘルシンキ大学で日本語について講じていたころ、岡はウィーン大学の日本研究所で日本語や日本の民族学について講じていた。このウィーン日本研究所は、欧州における学術的な日本研究の拠点形成する必要性を痛感していた三井高陽によって設立されたもので、三井は資金を拠出する際、所長には学術的な業績を重視し、岡正雄を強く推薦していた。岡は、三井の強い信頼を得て、初代所長に推挙され、ウィーン大学日本研究所の教壇に立ち、日本語と日本文化について講じたのである。なお、ラムステッドのヘルシンキ大学での日本語講座の後継者候補として、一時、岡のウィーン領事養成学校での同僚であったド・チョンホの名前が挙がっていたことがある。こうした事実から判断し、ド・チョンホを接点とし、ラムステッドは岡とも通じていた可能性はあるが、ラムステッドと欧州滞在中の岡との接点は確認できていない。

7-3. 外山高一 (1882~1969)

ウィーン大学古文書館資料によると、外山高一(東京外国語学校卒・ドイツ語)は、1921年~23年の間、ハンガリーのパズマニ・ペーテル大学(Pasmani Peter 現 ELTE 大学)で、日本語とモンゴル語を教えていた。1924年には、ウィーン大学で1924年に日本語講座を担当した。ハンガリーでの経験を活かして、比較言語学、モンゴル語学に関心のあった外山は、ウィーン大学において、モンゴル語やアルタイ言語学を教えることも希望したが、実現しなかった。外山は、帰国後は、東京芸術学校等でドイツ語教員を務めた。

外山からラムステッド宛て書簡のうち、1926年8月の書簡は、東京から一時帰国中のヘルシンキのラムステッドに宛てたドイツ語によるものである【画像5, Picture 5】。内容は、フィンランド語研究のために、いくつかのフィンランド語の参考図書を購入してほしいという内容である。その図書とは、フィンランド語史、フィンランド語語源学、小学生用読本の最新版、フィンランド語音声図、フィンランド語純化運動等に関するものである。

なお、父、外山正一(1848-1900)は、幕末から明治にかけて英米留学を経験し、東京大学文学部長、総長、文部大臣をつとめた人物である。『新体詩抄』の刊行

で近代文学への貢献で知られるが、英語教育においても、『英語教授法』(1897)を著し、言語の4技能の総合的教授を説き当時の画期的な書となった。高一は、幼少のころから欧州や言語とゆかりのある環境にあったものと思われる。

7-4. 吉武三郎 (1889?~1942)

吉武三郎は、ロンドン大学で1920年から蒙古語・日本語の講師を務め、日本語の音韻やモンゴル語研究に従事した。吉武からの書簡は、2通確認される。その一つ1933年3月12日付の書簡【画像6, Pictures 6】は、吉武自身「日本語の動詞と形容詞の活用」をまとめたが、ラムステッドが最近発表した朝鮮語とアルタイ語学に関する論考が参考になるとの情報から、その論考の複写を入手したいという問い合わせである。同年4月10日付の書簡は、ラムステッドから送付された同論考の複写へのお礼とラムステッドの研究が大変参考になり、自身の研究に自信をもったということ、吉武は現在7-8世紀の日本語の音韻に関する著書をまとめているという報告である。吉武は、モンゴル語をはじめ中央アジアの言語や古代日本語の音韻研究を英語で発表しているが、日本の国語学者や言語学者との交流は不明である。吉武が教壇に立っていたロンドン大学の日本語コースと言えば、第二次世界大戦中、東南アジアのイギリスの植民地における対日戦のために、多くの日本語情報部員を養成したことで知られている。このコースの開始は、1942年であり、吉武は、在職中の1942年に亡くなっていることから、吉武が語学兵の養成に従事したことはなかったと思われる。

吉武については、『戦中ロンドン日本語学校』(大庭定男著 中央公論社 1988年)の中で、「学問一途で日本人社会との付き合いはなかったようである」(p.10)と紹介されている。その「学問」について、彼の業績を以下に列挙する。

1) 論文

- ・ S. Yoshitake (1928). Some Mongolian Maxims. *Bulletin of the School of Oriental and African Studies*, 4, pp 689-702.
- ・ S. Yoshitake (1928). A Chapter from the *liger-n Dalai*. *Bulletin of the School of Oriental and African Studies*, 5, pp 81-90.
- ・ G. L. M. Clauson and S. Yoshitake (1929). On the Phonetic Value of the Tibetan Characters *Journal of the Royal Asiatic Society of Great Britain & Ireland* (New Series), 61, pp 843-862.
- ・ S. Yoshitake (1929). Auxiliary Verbs in Mongolian. *Bulletin of the School of Oriental and African Studies*, 5, pp 523-539.
- ・ S. Yoshitake (1930). The History of the Japanese Particle “I”. *Bulletin of the*

School of Oriental and African Studies, 5, pp 889-895.

・ S. Yoshitake (1930). Etymology of the Japanese word fude. *Bulletin of the School of Oriental and African Studies*, 6, pp 45-53.

・ S. Yoshitake (1931). An Analytical Study of the Conjugations of Japanese Verbs and Adjectives. *Bulletin of the School of Oriental and African Studies*, 6, pp 641-666.

・ S. Yoshitake (1933). Japanese Names for the Four Cardinal Points. *Bulletin of the School of Oriental and African Studies*, 7, pp 91-103.

・ S. Yoshitake (1940). The Alternance ι ω in Ancient Japanese. *Bulletin of the School of Oriental and African Studies*, 10, pp 666-678.

2) 書籍

・ Saburo Yoshitake (1934) *The Phonetic System of Ancient Japanese* Royal Asiatic Society, 71 頁

・ Saburo Yoshitake (1935) *Japanese. A Series of Conversational Sentences in Colloquial Japanese. With Explanatory Notes on the Japanese Alphabet and Pronunciation, Phonetic Transcription, Romanized Transliteration, English Translations and Reproduction in Japanese Script of the Texts, Etc.* [Linguaphone Miniature Language Series.] Linguaphone Institute, London

7-5. ド・チョンホ (都宥浩 ; 1905~1982)

ヘルシンキ大学ラムステッド文庫には、ウィーン領事養成学校の日本語講師の経験のある Do Cyong-Ho からの書簡、および、ウィーン領事養成学校からの書簡が数点確認される【画像 7, Pictures 7】。

この背景には、ラムステッドが当時研究上必要としていた朝鮮語の方言話者を、アンカラのメンゲスらを通じて探していたところ、ウィーン在住のド・チョンホを紹介され、インフォーマントとしてヘルシンキに呼び寄せる計画があった。ド・チョンホは、フランクフルト大学、ウィーン大学で学び、ウィーン大学から先史学で学位を得、ウィーン領事養成学校で岡正雄らとともに日本語講師をつとめていた。しかし、オーストリアがドイツに併合されたため、オーストリア外務省付であった当機関は閉鎖されたことで職を失ったド・チョンホは、ラムステッドの申し出を快諾したという背景があった。この書簡では、ヘルシンキ大学での雇用の詳細についての問い合わせである。一方、ラムステッドは、ドからインフォーマントになることに承諾を得たものの、ヘルシンキ大学では無給講師の職しか用意できず、この話は頓挫してしまう。ラムステッドから声をかけられながらもその後の音信がないことから、返事を催促する書簡が、ドや領事養成学校から複数届いている。この経緯の詳細については、日本

の外交資料等から拙稿で明らかにした²⁴。

8. おわりに

ヘルシンキ大学には、本論で紹介した書簡以外に、小倉進平の著書も別に保管されている。日本で出版された朝鮮語研究の成果を送っていたと思われる。このほか、長田夏樹は日本語系統論を扱った学位論文を送付したという。日本の外務省の外交記録には、1933年、ラムステッドの依頼に応じ、外務省が『蒙古語字典』（帝国陸軍編）を送ったという記録がある【画像8, Picture 8】。また、ラムステッドは、日本の言語学研究の動向も把握し、日本の学術成果も享受できていたようである。フィンランド側の資料と日本側の資料をあわせてみることで、国語学、比較言語学、朝鮮語学の研究が国境を越えて、相互にどう関わり合ったのか、複数の言語に通じた当時の言語学者らは、世界にネットワークを広げ、各地の成果が世界的な知を拠点につなぎ、さらに発信されていく過程が明らかになっていくのではないだろうか。

参考文献

小川誉子美 (2001) 「フィンランドにおける日本語講座の黎明期 (1938-45年) に関わった人々ー G.J.ラムステッド, 桑木務, M.ケラヴオリの功績を中心に ー」 『日本語教育』 109号 日本語教育学会 pp.100-109

小川誉子美 (2001) 「ラムステッドと日本語研究」 『広島大学留学生センター紀要』 11号

小川誉子美 (2010) 『欧州における日本語講座—実態と背景—』 風間書房

小川誉子美・重盛千香子 (2013) 「ウィーン領事養成学校の日本語講師 Do Cyong-Ho について—フィンランドと日本の資料による新解釈—」 加藤好崇・新内康子・平高史也・関正昭編著 『日本語・日本語教育の研究—その今、その歴史』 スリーエーネットワーク

長田夏樹 (1974) 「日本語の北方起源説」 『月刊言語』 Vol.3, No.1 大修館書店

亀井孝 (1971) 「言語の歴史」 服部四郎編 『言語の系統と歴史』 岩波書店

亀井孝・橋本萬太郎 (1979) 「日本語系統論の問題点<対談>」 『言語生活』 326 筑摩書房

金芳漢 (1986) 「韓国語と日本語の関係」 馬淵和夫編 『日本語の起源—世界の言語学者による論集』 武蔵野書院

楠家重敏 (1986) 『ネズミはまだ生きている—チェンバレンの伝記—』 雄松堂

²⁴ 小川・重盛 (2013)

桑木務 (1981) 『大戦下の欧州留学生活—ある日独交換学生の回想』中公新書

桑木務 (1951) 「ラムステッド」『学燈』Vol.48, No.5 丸善

小泉保 (1976) 「ラムステッド」『言語』Vol.5, No.11 大修館書店

鈴木広光 (1993) 「日本語系統論・方言圏論・オリエンタリズム」『現代思想』21 (7) 青土社

宋敏 (1969) 「韓日両言語比較研究史」聖心女子大学 (韓国)『論文集』1 菅野裕臣・野間秀樹・浜之上幸・伊藤秀人 訳 (1999)『韓国語と日本語の間』草風館 所収

宋敏 (1974) 「最近の日本語系統論について」韓国日本学会『日本学報』2 菅野裕臣・野間秀樹・浜之上幸・伊藤秀人 訳 (1999)『韓国語と日本語の間』草風館 所収

初芝武美 (1998) 『日本エスペラント運動史』財団法人日本エスペラント学会

服部四郎 (1959) 『日本語の系統』岩波書店

村山七郎・大林太良 (1973) 『日本語の起源』弘文堂

吉田澄夫 (1972) 「チェンバレン氏の琉球語研究」外間守善編『沖縄文化論叢』第5巻 平凡社

李基文 (1974) 「日本語系統論によせて」『月刊言語』Vol.3, No.1 大修館書店

Embassy of Finland 1994 *75th Anniversary of Finnish—Japanese Diplomatic Relations*, Tokyo

Halén, Harry 1998 *Bakshi, Biliktu · The Knowledgeable Teacher. G.J. Ramstedt's Career as a Scholar, Memoires de la Société Finno- Ougrienne*, 229 Suomalais-Ugrilainen Seura Helsinki

Halén, Harry 1985 *Japanese Studies in Finland, Japanese Studies in Europe, Directory Series VII*, The Japan Foundation, Tokyo

Menges, Karl H. 1986 *Japanese and Altaic* 馬淵和夫編『日本語の起源—世界の言語学者による論集』武蔵野書院

Miller, Roy Andrew 1971 *Japanese and the Other Languages*, The University of Chicago Press 西田龍雄 監訳 (1981)『日本語とアルタイ諸語』大修館書店

Momose, Hiroshi 1973 *Japan's relations with Finland, 1919-44 as reflected by Japanese source materials Slavic Studies 17*, Slavic Institute of Hokkaido University

Ramstedt, Gustaf John 1924 *A Comparison of the Altaic Languages with Japanese, Transactions of Asiatic Society of Japan the 2nd series I*, Asiatic Society of

Japan

- Ramstedt, G.J. 1950 *Lahettiläänä Nipponissä*, WSOY Helsinki 坂井玲子訳
『フィンランド初代公使滞日見聞録』1987 日本フィンランド協会
- Ramstedt, G.J. 1953 *Japanilainen Runoja*, 『日本の詩歌』 WSOY Helsinki.